

## 大正の抵抗

### 大正のくらし

『戦争成金』の登 上 第一次世界大戦の戦争景気に酔った時代である。戦争が船舶や鉱物の著しい需

いたく物語が世の話題となった。大正デモクラシーの自由な文化の風の吹きぬけた時代であった。しかし、デモクラシーの疑似性を衝く社会主義思想の抬頭の季節でもあった。

経済史的には、この一五年間は日本の近代化史上の一つの安定繁栄期とされ、国民生活も向上した。電灯は全国に波及し、人口の都市集中も著しかったが、住宅難もなかった。一杯五銭のコーヒーが大衆に親しまれ、五銭、十銭のキャラメルや洋菓子や文化の香りを与え、円タクが三十銭、五十銭で都会の街まちを走った。

物価高と 物価高と しかし、大衆は不景気や物価高の深刻な体験にも出くわしている。大正七年の

『貧乏物語』 小学校教員の初任給は一七円であったが、物価計算で現在に換算すると四千円と

なる。大正七年は米価が二年間に三倍と急上昇して全国的な米騒動が起きている。物価も大正三年

を一〇〇とするど七年には一八六とはね上がった。明治三三年には初任給で米一石買えた新任小学校教員であったが、大正七年には五斗も買えないことになった。

官立大学卒の役人の初任給は大正二年で四五円、当時の社会体制を反映して給与格差は大きかった。現在とちがって大学卒は「学士様なら娘をやるか」という俗語まで出た大変なエリート・コースであった。

大正のなかごろの物価は米一升五十銭、清酒一升二円、鶏肉百匁一円、塩ザケ一貫匁一円、のり一帖二十五銭、牛乳一合六銭、豆腐一丁四銭。

大正五年の不況のなかで河上肇の『貧乏物語』が出て大いに読まれた。成金の巨富、物価騰貴と民衆の生活難を、解決すべき社会の欠陥として提示した。

### 一 寒村の抵抗記録

#### 『夢痕集』

長野県立図書館の郷土資料室の一隅に『赤穂事件 夢痕集』という古ぼけた、エンジ色の一冊の本が埃をかむっていた。著者は下村雅司、発行所は東京信義堂となつている。非売品。

この本は、大正二年八月に起こった赤穂騒擾事件の関係者が、事件の記録をつづつたもので、悲憤の感情が書中にあふれている。

事件は赤穂村民の大部分と長野電灯株式会社側との紛争が村民を暴動的行動にまでかりたて、多数の村民が不当な刑罰の憂き目を負わねばならなくなった事実である。

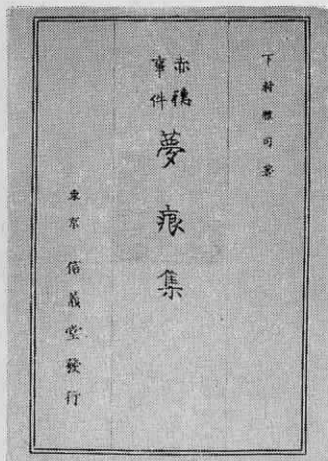
赤穂事件はどうしておきたか。

信州上伊那は、そのころ、けわしい山地で産業というようなものもなかった。しかし、伊那の狭谷は天恵的に水力発電に適している。山岳のあいだを縫って流れる河川で大きな電力が得られる。これに着眼した伊那の民間有力者重盛氏が明治四一年に電灯のまだなかったこの地方に、電灯用の発電を申請して許可を得た。ところが当時長野市にあった長野電灯会社（社長花岡次郎）は県下各地の水利権を買収して発電所設置を企だてていた。



大正九年の恐慌

(預金引き出しに銀行に押しかけた人々)



長野電灯は重盛氏の利権を買いとつて、自らの手で発電を企だて、電力配給地域に富田村、赤穂村をも編入して許可をうけるために当局に出願した。

赤穂村長福沢氏は、赤穂村から単独に出願して、村民の手で電灯事業を経営するほうが、営利会社の高い電氣を買うよりは有利と知っていたので、福沢氏名義で出願にふみ切った。

しかし、長野電灯の出願は認可され、福沢氏の出願は不許可となつて、いっさいの関係書類が戻されてきた。

事件の遠因はこんなところにあつた。

会社側には許可、福沢氏には不許可のうら側には、力のあるものの運動の結果であることは想像できた。

福沢氏は有志と前後策を研究しているうち、長野電灯に交付された許可指令の写しのなかに「国または供給地域を管轄する公共団体において、電灯事業の全部または一部を買収せんとするとき、会社はこれを拒むことを得ず」という一項があることに、フト気がついた。赤穂村自治体が経営すれば、というアイデアが浮んだ。そうすれば電灯経営によつて村費の増収を図り、安い電料で村民の負担を軽くできるのだ。

福沢氏は、こんどは赤穂村長の名儀で長野電灯に対し赤穂村内の電力事業経営権の譲り受け方を知事に出願した。大正元年の暮のことであつた。

村長は村内有力者とはかつて村民に事の真相を衆知させ、挙村一致の団結態勢をつくりあげた。

目的完徹までは、たとえ長野電灯がどう言おうと、会社側の電力の供給を受なけいことを決議し、村内の私有地を会社側に貸与しないことなどを申し合わせ、会社から電柱その他の工作物の建設で道路の使用方を出願してきても許可しない方針をとることになった。こうすれば会社は村に電灯工事をすることもできないからだ。

ところで、長野電灯社長の花岡は県政にも深く参与し、政党の支部においても重きをなしており、親戚には代議士があつて、その代議士は政党の最高幹部とふかい因縁を持つていてという人物だつた。

村民の結束は固かつた。会社の電灯お断りと拒否の態度を示したので、会社側の工事は進まない。困つた会社は村の新聞、牛乳などの販売業者笹古某を味方に引き入れた。そしてかれの私有地の一面を借りて、県道に沿つて電柱を立てようとした。

会社が笹古の家に点灯の目的で電柱を立てるため数名の工夫が道路に数個の穴を掘つた。これを知つた村民はスグにその穴を埋めてしまった。

いかつた村民たちは、長野電灯のために村民を裏切つて便宜をはかつている笹古の販売する新聞、牛乳は買わない不買同盟を決議してしまつた。

反対行動にふみ切つた村民の胸のなかに「不許可」へのいかりが新しくもえ上がつてきた。小さい寒村であっても、一つの自治体なのだから国が一回の調査、一片の文書によつても実体を調査してくれるのが当然ではないか、当局は、営利会社の利益の擁護につとめていることは不可解だ、

背後に大政党の魔手がうごいている、これに対してたたかわねばならない、こんな決意が集会で表明されて、村民の結束のムードが強化された。

実際、長野県は自由党らしい、政友会の地盤で、長野電灯会社の重役ならびに株主は政友会に党籍のあるものが多く、社長は県支部の中堅であり、県会議長、代議士にまで出る勢力家であった。

こんなときに、村民の感情をおおるように一つの事件がもち上がった。それは福沢村長が消防組頭を辞任したことだった。その理由は電灯問題で警察は村に対して冷淡な態度をとり、村営の無謀をあざわらうような口吻をもらしたり、村民が村営実現に熱中しているときに、赤穂警察分署は長野電灯の供給をうけて点灯しているだけでなく、分署長松野は部下の巡査に長野電灯の点灯を理髪屋その他に勧誘させた、というのだ。

警察のこの態度への非難の意味をこめて福沢村長が消防をやめると、同村の消防組は部長から小頭にいたるまで、全部辞表を出してしまった。おだやかならぬ空気が村にみなぎりはじめた。

#### 不点火同盟

#### 崩れる

村長は上京した。なぜ村営が許可されないのか、原因がどこにあるのか。内務省と通信省に出頭して調査し、さらに再出願をなしうるかどうかをたしかめた。不点火同盟  
思議に要領を得させない。ここで、さきに出願を却下された理由は、長野電灯の運動によるものではないかという疑惑が、ますます濃くなってきた。

一方、村としては、長野電灯より点灯は受けられない方針をかたく守っている。会社側は切りくずし策を考えはじめた。その相談相手が前記の笹古であった。

切りくずし策は成功した。原因はささいなことであった。当時、敷設中であつた伊那電車会社の軌道が赤穂村の東裏を通過すると内定したと伝えられた。しかし、赤穂村の将来の発展策としては西裏を通過させることがよい、という意見から、村長は有志を集めて協議し、西裏を通らせることにきめた。ここで、東裏の住民に不服の者があらわれた。会社側は笹古と相談の結果、村民側のこの虚につけ入った。村の決定に不服な数名の者が笹古の側に立った。

この数名を拠点にして親類縁者にはたらきかけ、これらの者が長野電灯の供給を受けると言い出した。これで固い結束の不点火同盟の一角はくずれた。

村民一致の態勢にヒビがはいったことは、村民をいからせた。「村民大会を開け」の声がおき、四百名ほどが劇場トキワ座に集まった。

村民の一致をやぶった点灯者に社会的制裁を加えて長野電灯の政略を防げ、と叫ぶ声がつよくなって、会場は興奮でわきたった。この勢いに主催者のほうがおそれをなして逃げ出そうとしたような状況だった。

『夢痕集』はそのあとのことをつぎのように記録している。

「会場から流れ出た群衆約三百人は、点灯した野溝理髪店大正軒（現在の大正軒）から松崎栄吉方附近まで、役場を中心に押寄せて、煌々と輝やく電灯の光りを浴びながら、夕風の涼しさに酔を發散させつつあらゆる悪罵、嘲笑を浴せかけ、怨恨を一挙に晴さんとする有様、一種の示威であり、村民全体の威嚇であった。中には投石する者すらあつて、雨戸、硝子、窓障子、火鉢等破壊されたものもあつた。赤穂警察署で

は、時を移さず、非常招集を行つて、嚴重に警戒し、私服の警官は群衆中にまぎれて、投石者を捕縛しようとして居た。この時、運悪くも、電灯委員の中坪長蔵は、石を拾つて、大正理髪店へ投げつけようとした瞬間を、警官に取押へられた。之を見た群衆は、口々に中坪を取戻せと叫んで端なくも警官対群衆の争闘が演ぜられ、殴る踏む蹴るの大騒ぎをしたが、中坪君は遂々、警察署に引致された。是のため、警官は群衆に退散を命じ、群衆も、更けゆく夜と共に帰路についたので漸次四散し、十一時頃には全く解散した。当夜は、僅かに形勢の險悪なるを示したのみで、何事もなく過ぎ去つた。」

あくる日、赤穂村には險悪な気分がみなぎつた。村は前夜のうわざでもちきりで、会社からの電灯点火者に対する不満がみなぎつた。

何かがおこる、そんな予感で午後七時半ごろには赤穂郵便局前附近から、理髪店大正軒を中心に点灯者松崎の居宅附近までに集まつて見物をかねた、一種の示威運動が行なわれはじめた。八時半ごろのこと、突如、安楽寺の鐘がなりひびいた。これが何かを暗示するかのようには、集まつた群衆の耳にひびいた。このころから、群衆はときどき喚声を上げては、投石し、機あらば、襲撃しようとする形勢があらわれてきた折だったので、この鐘の音はいっそう群衆をかり立てる作用となつた。一二名の警官が警戒していたが、群衆のふえるにもなつて、石は間断なく大正軒の窓ガラスめがけて投げつけられた。

「警官は積極的鎮撫策を採らず、漸次群衆を解散させる方法で、大正軒前の三つ辻に樹てられた電柱の街灯を、百燭光の電球にとりかへさせ、あたりを限なく照らし、昼のごとく輝き、群衆は光りを避けて、西側の松岡小問物店、角十綿屋附近の軒下に、警官隊は、宮本楼の南に、電灯の光を浴びて群衆と対峙した。歩一步、警官は洋剣をガチャつかせながら北進してきた。かくて群衆を郵便局以北に退かして解散を命ずるもの如く、群衆はその数、五百余にも上り居ることとて、容易に後退せず。西側のもの暗き軒下にひそんで、姿を光りの前に出さなかつた。沈黙裡の対峙に、まづ群衆は巡查の白服めがけて二三の者が投石した。と思ふとき、群衆めがけて、バラバラと石が飛んで来た。反感と憎悪とに緊張し切つて居た群衆は、興奮のあまり、警官隊に向つて襲撃した。飛散し来る石を避けて後退する警官隊の跡を猛烈に追撃した。と見るうちに、群衆中から投げられた一木片は、街頭に輝やいて居た電球に命中した。

ハッとした瞬間に四辺は、暗夜となつた。機乗すべしと暴衆と化した群衆は、喊声を挙げて突進し、うっ憤を晴さんとするは此の時ぞと、堤を切つた水勢のごとく、理髪店大正軒に、殺到した。警官隊は分署内に通入して仕舞つた。指揮者ともない。群衆心理に支配されたに過ぎないのだ。時まさに十時過ぐる四十分であつた。

大正軒内の狼籍、手当り次第器物は破壊する。喊声を挙げて暗夜に狂奔する猛獣のそれのごとく、屋内は全く破壊されつつある。

と見るうち、手拭ひで頬冠りした一人の男は、もの凄く輝やく街頭に、姿を現はし、ツーと飛び出して、野溝馬車店に飛び込み、乗合馬車一台を、曳き出して、街路に転倒させて破壊した。続く数名、十数、数十名、続々押寄せて、またたく間に三台の馬車を街上に破壊し去り、屋内に侵入して破壊せんとしつゝあつたとき、警察署内から、雑然たる騒音を通して、鋭い呼子の笛が鳴り渡つた。」

このとき、松野分署長はまっさきに抜剣し、つづく警官もまた全部剣を抜いて、かがやく街灯の



光にピカピカと反射する剣身をふりかざして、暴徒めがけて突進してきた。

このとき、警官は群衆のなかの二人の胸を刺した。

「切られた！」

叫び声に、やみに姿をかくしていた暴徒の一群はわれを忘れて集まってきた。群衆は殺気立った。その数一千余名の群衆は野溝馬車店を破壊し、赤穂警察分署に投石し、警官を警察分署外に一歩も出させず、点灯者松崎方を襲撃して破壊し、騒動はますます拡大され、消防が出動し、安楽寺の鐘も半鐘を乱打しはじめ、町内は全く戦場のようになったが、襲撃はますますひどくなった。

点灯者の居宅を全部破壊してしまふと、群衆は勢に乗じ「笹古、笹古」と連呼しながら、村営電灯に反対の張本人笹古方におしよせ、門扉に投石して庭内に侵入し、家屋を破壊しようとしていたとき、ムクムクとのぼる白煙とともに南の便所わきから火の手が上がった。だれかが放火したのである。

赤穂村警察分署ではどうすることもできず、警官は署内で息をひそめていた。本署である伊那警察に電話で救援をもとめた。警部補が巡查一〇名をつれて急行したが、群衆に襲撃され、危険だと警察署内になげこんでしまった。

やがて、県の警察本部の指令で各所から約百名の警官が出動したが、血迷った松野分署長は豊橋師団に向かって軍隊の出動を要請した。

企業と権力 事件のあと、地方新聞はこの問題を論じ、長野電灯の社長花岡次郎が不点火同盟の結託をやぶるためにあらゆる手段をとったが、そのなかで村長福沢氏に対しては株券を与え、常務員の地位を提供し、月給二百円を明言したこと、また、笹古には二千円贈与で誘惑したと報道している。

赤穂の村民が長野電灯から電灯の供給を仰がないでいるとき、赤穂分署は率先して電灯をつけたばかりでなく、調査は村民に点火の申し込みをすすめて歩いた。そして自らもとりつけ工事をさしているものもあつた。事件の夜、松野分署長は抜剣した巡查を物かげにかくしておいて合図とともに群衆のなかにおどりこませて負傷者を出した、と報道している。

『信越新聞』は、『警察側の弁明』と題して、やむをえず威嚇のつもりで抜剣した、その剣へ群衆の身体が当たったのであつて、決して切ったのではない、という意味の記事をほとんど一段を費して書いたが、「信越新聞の佐藤桜哉は矢島浦太郎の子分だ。矢島と花岡との間にどんな関係があるかないかはいうだけ愚だ」と書いた新聞もあつた。

警察に対する憎悪と反感が村民にあふれた。県警察本部でもこの状態を察知したか、騒動発生の責任者として松野分署長は休職、調査部長は転任、その他の巡查も全部転任させられている。

赤穂村騒擾事件は、多数の村民が裁判にかけられた。判事の誘導訊問で多数の偽証者が出た。当時、事件の性質を知り、村民に同情して東京から大衆の味方として知られた今村力三郎（後に専修大学総長）、弁護士布施辰治や高名な江木衷博士その他が弁論に立った。

『夢痕集』のはしがきに今村力三郎は書いている。

「赤穂事件は、長野電灯なる財力と、国家の権力とが、同一の針路を採り、村民の要求を一蹴し去らんとしたるが遠因を為し、村民の一致を、内部から崩壊せんと奔走し、現に、数名の内応者の出たことが近因を為して居る。激して背法行為にまで突進した村民に責任ある事は言うまでも無いが、社会的、政治的に觀察すれば、財力と権力とが一致して、道理ある村民の主張を蹂躪し去った力の信者達には、村民より更に重き責任ありと、論断することは不当に非ずと信ずる。」

「騒擾罪の突発した後にも力の問題がある、それは、検事や、予審判事が、赤穂に出張して、嫌疑者を検挙するにあたり、頗峻烈に司法の権力を發揮したので、却って真相が蔽はれ、多くの被害人中、冤枉を訴ふるものが少くなかった。公判に移った後にも、公判判事は書類から先入した頭脳に支配せられ、少しでも被告に利益の証言をするものは客赦なく偽証罪で監獄へ送られた。神の眼から見たら、偽証とせられたものが真実であつて、真実とせられたもの却つて偽証であつたかも知れない。被告の利益の為に申請した証人が、被告の利益の証言をすれば、片ツ端から偽証で起訴せられる、検事は職権を暴用して、御苦労にも監獄に出張して、被告人と弁護人の接見にまで立会して干渉するほどの形勢で、我々弁護人も施す術を知らなくなつた。」

赤穂事件は一寒村の小さな騒擾事件にすぎない。しかし、ここには生活を守る民衆が対決しなければならなかった体制悪の顔がくつきり浮んでいたところに、典型としての意味が感じられる。

### 電車賃値上げ反対の紛争

大正三年九月六日のことである。名古屋の鶴舞公園の運動場で市内電車を経営する名古屋電気鉄道株式会社の電車賃値上げ案に反対する市民大会が開かれた。

『名古屋市史』によつてこの抵抗をみてみよう。

これまで名鉄経営の市内電車は「一区一銭、二区二銭」と俗語にまで唄われていたように、栄町から築港まで、片道三十六区三十六銭、往復すれば七十二銭というペラボウな高い電車賃になる。その当時一日一円、一カ月三〇円の収入のあるものは、中流の生活をいとむことができた。三〇円の月給といえ、役所では課長クラスの収入であつた。そんな時代に電車賃が築港往復七十二銭であるから、市民のあいだに問題の起こるのは当然だつた。

この運動はすでに八月から、市内の各所で演説が催



電車焼打事件の新聞記事

され、ようやく市民の与論の高まるのをまって、この大会となったのである。

九月六日といえば、まだ暑いさかりで、夕涼みがてらに参集した市民は三万を超えた。生活の問題であるだけに市民は熱心で、むしろ熱狂的な興奮にまで、かり立てられていた。これで市民大会は一応閉会となった。しかし、まだ興奮のさめやらぬ聴衆は、公園の噴水塔前で、警官と小ぜり合いをし、ひしめくように鶴舞公園前の停留所に殺到した。

「これだけの聴衆が集まっているのになぜ増車をしないのだ。大体会社側は怪しからんぞ」  
監督がやり玉にあがってさつそく老松車庫へ交渉したが、来る電車はたちまち満員となって、停留所附近は次第に黒山の人となってきた。

「監督ではラチあかん。老松車庫へ行け」  
群衆は電車道をなだれを打って、老松車庫へ向かった。ちょうどその一団が愛知病院前まで来ると、後方から新栄町行の電車が、チンチン警鐘を鳴らしながら除行してきた。もちろん乗客はすし詰満員である。

「何をいつているんだ。あとからついて来い」  
と、いつかな道をあける様子がない。そのときチャリンとガラスの破れる音と、乗客のざわめきが起こって電車は停止した。だれかが運転台のガラス目がけて投石したのだ。それをきっかけにポールをはずしたので車内は暗がりとなり、乗客はあわてて軌道へ飛び降りる、乗務員は報告のために老松車庫へ走る事態となった。

「電車を叩きつぶせ」

「よしきた……わいしょ、わいしょ」

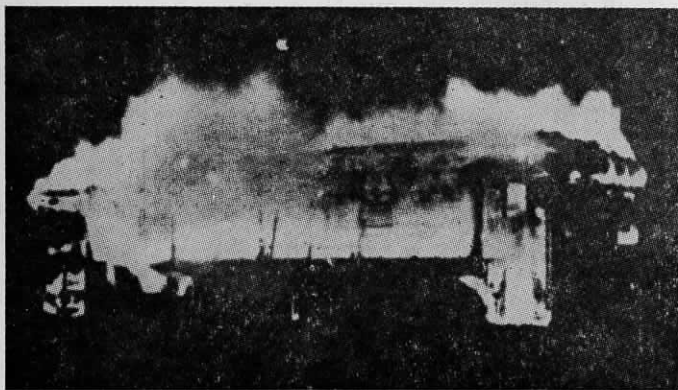
だれかが普請場から丸太をかついできて、それを電車の車輪の間に突っ込んで、かつぎ上げた。電車は脱線して運転不能になる、窓は蜂の巣のように叩き破られて、群衆は暴動化し「バンザイ」を叫びながら老松車庫へ向かった。

これが五、六、七の三日にわたって行なわれた「電車焼打事件」の発端だ。

一方公園前から上前津に向かった一隊は、門前町で二台の電車を襲撃、これに火を放って喚声をあげながら広小路に向かった。ちょうどそのころ、老松車庫を襲った一団が、納屋橋方向に向かっていたので広小路で合流して柳橋に向かい、志摩町附近では郡部線の電車と遭遇して、

「こいつも同類だ」

と投石した揚句火をかけた。



焼打ちで燃える電車

(名古屋市交通局『市営三十年史』より)



そのころ群衆は広小路をブラついていた連中も加わって、四、五千名の大群となっていた。附近の商家は大戸をおろしてしまつた。

「本社へ行け！」

とばかり那古野町にあった名古屋電気鉄道株式会社の本社へ群衆は殺到した。かねてこの事あるを予期した会社側は、工夫をかり集めてこれにあたらせたが、衆寡敵せずたちまち群衆は板囲いを破つて乱入、東南隅の材料置倉庫に火を放つた。

「つぎは倉庫だ！」

群衆は車庫に放火しようとしたが、工夫が犬クギを弾丸代りに投げつけるので近寄ることができず、駆けつけた警官隊と乱闘となつて、負傷者続出、引致されるもの百数十名に及んで、この夜の暴動は一応おさまつた。

二日目は、夜になるとどこからともなく群衆が集まつて、まず同会社の郡部線のターミナルとなつていた柳橋停車場に火を放ち、火の手が揚がると凱歌をあげて市役所（現中区役所）へ殺到した。ここではすでに守衛や警官が警備して、さしもの群衆も手が出ないので、会社重役の私邸に向かつて、このときついに軍隊の出動をみた。

「兵隊にやかなわぬ。今夜は解散しよう！」

とクモの子を散らすように退散した。民間の騒擾で軍隊の出動をみたのは、ここではこれがはじめてである。それでも各おもだつた重役の私邸では、投石されたり、門扉を破られたり、危うく放

火されようとしたが大事にいたらずに済んだ。

第三日目は朝から電車の運行を休んだ。夜になると柳橋附近に集合した一団は、引致されたものをとり返そうと江戸川署に殺到して、警官と小ぜり合いがあつたが、ここでも軍隊の出動によって追ひ散らされた。

三日間にわたる電車焼打事件は平静にかえつた。

名古屋市交通局の『三十年史』も、この焼打事件について書いているが、『三十年史』によって補足してみよう。

電車賃の高いことに対する市民の不満は明治四〇年ころからあつた。「会社は、この頃黄金時代を築き上げたほど莫大な収益をあげていたから、会社に対する市民の非難は電車市営論となつて巷に流布し始めた」と書いている。

鶴舞公園の市民大会に集まつた人数は五万（あるいは三万）と記録している。

『三十年史』はまた「以後五日間、柳橋停留所を始め市内各所において群衆嘯集し、会社々長及び重役を襲い、警官交番所、電車出張所を焼き、群衆及び警官の負傷者も相当数に上ほり」と書いている。

また、このような騒擾事件は、その当時まで名古屋において前例をみなかったから、警察当局では、屋外演説会を許してあつたが、それ以後は夜間における演説会は禁止することになつたと、『三十年史』はつけ加えている。